

名娼満月

夢野久作

青空文庫

人^{じん}皇^{のう}百十六代桃園天皇の御治世。徳川中興の名將軍吉宗公の

後を受けた天下泰平の真盛り。九代家重公の宝^{ほう}曆^{れき}の初めつ方。

京都の島原で一と云われる松本楼に満月という花魁^{おいらん}が居た。五

歳の年に重病の両親の薬代に代えられた松本楼の子飼いの娘ながら、名前の通り満月をそのままの美しくしさ。花ならば咲きも残らず散りも初^そめぬ十九の春という評判が、日本国中津々浦々までも伝わって、毎年三月の花の頃になると満月の道中姿を見るために洛中洛外の宿屋が、お上りさんで一パイになる。本願寺様のお会^え式^{しき}にも負けぬという、それは大層な評判であった。

その頃、満月に三人の嫖客^{おきやく}が附いていた。

一人は越後から京都に乗出して、嵯峨野の片ほとりに豪奢な邸宅を構え、京、大阪の美人を漁りまわしていた金丸長者と呼ばれる半老人であつた。はからずもこの満月に狃染んでからというもの、曲りかけている腰を無理に引伸ばし、薄い白髪鬢を墨に染め、可笑しい程派手な衣裳好みをして、若殿原に先をかけられまいという心遣いや金づかいに糸目を附けず。日本中を真半分に割つて東の方に在るものは皆、満月に買うてやりたいほどの意気組であつた。

今一人は青山銀之丞ぎんのじょうという若侍であつた。関白七条家の御書院番で、俗に公家侍というだけに、髪かみの結むすい振り。素袍すおう、小袴こばかまの着こなしよう。さては又腰こしに提ひげた堆ついで朱しゆの印籠いんろうから青貝あざの

鞆さや、茶ちやづか、白金具しろかなぐという両刀の好みまで優にやさしく、水際
 立った眼元口元も土佐絵の中から脱け出したよう。女にしても見
 まほしい腮あぎとから横よこびん鬢へかけて、心持ち青々と苦味走ったところ
 なぞ、鬘斗目のしめ、麻あさがみしも 袴あさがみしもを着せたなら天晴れ何万石の若殿様にも
 見えるであろう。俺ほどの男ぶりに満月が惚れぬ筈はない。日本
 一の美男と美女じゃもの。これが一いつしよ所しよにならぬ話の筋は世間に
 あるまい……といったような自惚うぬぼれから、柄えらにない無理算段をし
 て通い初そめたのが運の尽き。案の定惚れたと見せたは満月の手管
 らしかつた。天下の色男と自任うちしていた銀之丞が、花魁おいらんに身上
 げでもさせる事か。忽ちうちの中に金に詰まり初め、御書院番のお役
 目の最中は、居眠りばかりしていながらに、時分を見計らつては

受持っている宝物棚の中から、音に名高い利休の茶匙ちやさじ、小倉の色紙を初め、仁清にんせいの香炉こうろ、欽窯きんようの花瓶けいびんなど、七条家の御門の外に出た事のない御秘蔵の書画骨董こつとうの数々を盗み出して、コツソリと大阪の商人に売りこかし、満月に入れ揚げるのを当然の権利か義務のように心得ている有様であつた。

残る一人は大阪屈指の廻船問屋、播磨屋はりまの当主千六せんろくであつた。二十四の年に流行病はやりやみで両親を失つてからというもの、永年勤めていた烟けむたい番頭ばんとうを逐おい出し、独天下ひとりてんかで骨の折れる廻船問屋の采配を振り初めたところは立派であつたが、一度、仲間の交際つきあいで京見物に上り、眉の薄い、色の白いところから思い付いた役者に化けて松本楼に上り、満月花魁の姿を見てからというものの役者

の化けの皮はどこへやら、仲間わに笑われながら京都に居残り、為か替わで金を取寄せて芸者末社の機嫌を取り、満月との首尾のために清水の舞台から後うしろと跳びでも厭いとわぬ逆上のぼせよう。自宅うちから心配して迎えに来た忠義な手代に会いは会うても、大阪という処が、どこかに在りましたかなあという顔をしていた。

満月はこの三人に対して締めつ弛ゆるめつ、年に似合わぬ鮮やかな手管を使つて見せたので、三人の競争はいよいよ激しくなつて行くばかり。満月の名娼ぶりの中でも一番すごいのは、その持つて生まれた手練手管であることを、三人が三人とも、夢にも気付かぬ気はいであつた。どうしてもこの大空の満月を自分一人の手に

握り込まねば……という必死の競争を続けるのであった。

しかし、そのうちにこの競争も勝敗が付きそうになつて来た。

青山銀之丞は、宝暦元年の冬、御書院の宝物お検めあらたの日が近づく前に、今までの罪の露見を恐れ、当座の小遣のために又も目星めぼしい宝物を二三品引つ抱えて、行衛ゆくえを晦くらましてしまったのであつた。

播磨屋千六は、これも満月ゆえの限りない遊興に、敢あえなくも身代を使い果して、とうとう分散うきめの憂目に会い、昨日きのうまでの栄華はどこへやら、少しばかり習いおぼえた三味線すがに縋すがつて所も同じ大阪の町中を編笠一つでさまよいあるき、眼引き袖引きうしろゆび後指

さす人々の冷あざわらい笑よそを他所よそに、家々の門口に立って、小唄を唄うよりほかに生きて行く道がなくなっている有様であつた。

その宝暦二年の三月初旬。桜の蕾つぼみがボツボツと白く見え出す頃、如何なる天道様てんとうさまの配とりあわせ合あであつたらうか。絶えて久しい播磨屋千六と、青山銀之丞が、大阪の町外れ、桜の宮の鳥居脇でバツタリと出会つたのであつた。

最初は双方とも変り果てた姿ながら、あんまり風采ふうさいが似通つているままに、編笠の中を覗いてみたくなつたものらしかったが、さて近付いてみると双方とも思わず声をかけ合つたのであつた。

「これは青山様……」

「おお。これは千六どの……」

二人とも世を忍ぶ身ながらに、落ちぶれて見ればなつかし水の月。おなじ道楽の一蓮いちれんたくしやう托生たくせいといったような気持も手伝つて、

昔の恋こいがたき 仇あいつの意地張はどこへやら。心から手を取り合つて奇遇

を喜び合うのであつた。蒲公英たんぽぽの咲く川堤かわどてに並んで腰を打ちか

け、お宮の背後うしろから揚る雲雀ひばりの声を聞きながら、銀之丞が腰の瓢ふくべ

と盃わらじを取出せば、千六は恥かしながら背負うて来た風呂敷包みの

割籠わりごを開いて、焼いた干ほしいわし鰯つまを掴み出す。

「満月という女は思うたよりも老練てだれもの女で御座つたのう」

「さればで御座ります。私どもがああの死にコジレの老人に見返えられましようとは夢にも思いかけませなんだが……」

なぞと互いに包むところもなく、黄金こがねゆえにままならぬ浮世をかこち合うのであった。

「それにしても満月は美しい女子おなごで御座ったのう」

「さいなあ。今こんじよう生の思おぼい出でに今一度、見たいと思おもうてはおりまするが、今の体ていたらく裁さいでは思おもいも寄よりませぬ事ことで……」

「……おお……それそれ。それについてよい思案しあんがある。この三月よの十五日よの夜よには島原で満月の道中みちなかがある筈はずじゃ。今生こんじの見納けんめに連れ立つつて見みに参まろうでは御座ごらぬか。まだ四五日まの間まが御座ごるけに、ちようどよいと思おもいまするが……」

「さいやなあ。そう仰お言まりましたら何いで否いなやは御座ごりましようか。なれど、その途中ちゆうちゆうの路用ろじゆうが何いとして……」

「何の、やくたいもない心配じや。拙者にまだ聊かの蓄えもある。それが氣詰まりと思わるるならば此方、三味線を引かつしやれ。身共が小唄を歌おうほどに……」

「おお。それそれ。貴方様の小唄いうたら祇園、島原でも評判の名調子。私の三味線には過ぎましようぞい」

「これこれ。煽立てやんな。落ちぶれたなら声も落ちつろう。ただ小謡よりも節が勝手で氣樂じやまで……」

「恐れ入ります。それならば思い立ったが吉日とやら。只今から直ぐにでも……」

「おお。それよ。善は急げじや」

酒のまわり工合もあつたであろう。さもなくとも色事にだけは

日本一押おしの強い腰抜け侍に腑ふ抜け町人。春の日永ひながの淀川づたいを十何里が間。右に左にノラリクラリと、どんな文句を唄うて、どんな三味線をあしろうて行つたやら。揃揃いも揃揃うた昔に変わる日焼づらに鬚蓬ひげぼうぼう々たる乞食姿で、哀れにもスゴスゴと、なつかしい京外れの木賃宿に着いたのが、ちようど大文字山なかぞらの中なかぞら空に十四日月のほのめき初そむる頃おいであつた。明くれば宝暦二年の三月十五日。日本切つての名物。島原の花魁おいらん道中の前の日の事とて、洛中洛外が何とのおう、大空に浮き上つて行きそうな気はいが、二人の泊っている木賃宿のアンペラ敷の上までも漂うていた。

月は満月。人も満月。桜は真盛り……。

島原一帯の茶屋の灯火あかりは日の暮れぬ中うちから万燈まんどうの如く、日本

中から大地を埋めむばかりに押寄せた見物衆は、道中筋の両側に身動き一つせず。わけても松本楼に程近い石畳の四辻は人の顔の山を築いて、まだ何も通らぬうちから固唾かたずを呑んで、酔うたようになつていた。

そのうちに聞こえて来る前触しんせの拍子木。草履のはためき。カラリコロリという木履ぼくりの音につれて今日を晴れと着飾つた花魁衆の道中姿、第一番に何屋の誰。第二番に何屋の某かれと綺羅きらを尽くした伊達姿だてが、眼の前を次から次に横切つても、人々は唯、無言のまま押合うばかり。眼の前の美しくしきを見向きもせず。ひたすらに背後うしろを背後をと首を伸ばし、爪立ち上つて、満月の傘を待ちかねている気はいであつた。

銀之丞、千六の姿も、むろんその中に立交たちまじっていた。よもや満月花魁が、俺達の顔を見忘れはしまい……あれ程の仲であつたものを……という自惚うぬぼれと、見咎められては生きながらの恥辱という後めたさとが一いつしよ所になつた心は一つ。互いに後あとになり先になり、人垣を押しわけ押しわけ伸び上り伸び上りするうちに、先を払う鉄棒かなぼうの響。男衆の拍子木の音。囃はやし連つるる三味線太鼓、鼓つづみの音なぞ、今までに例のない物々しい道中の前触れに続いて、黒塗、三枚歯の駒下駄高やかに、鈴の音ねもなまめかしく、ゆらりゆらりと六法を踏んで来る満月花魁の道中姿。うしろから翳かげしかけた大傘の紋処はいわずと知れた金丸長者の抱茗荷だきみょうがと知る人ぞ知る。鼈べつこう甲くわずくめの櫛かんざし、簪かんざしに後光の映さす玉の顔かんぼせ、柳の眉つづれ。綴つづれ

にしき錦うちかけの襦じゆす襦じゆす子すの丸帯に金銀二艘オランダふねの和蘭陀船模様の刺ぬいとり繡、眼を驚かして、人も衣裳も共々に、実げに千金とも万金とも開あいた口くちの閉せがらぬ派手姿。蘭奢待らんじやたいの芳香かおり、四隣あたりを払うて、水を打ったような人垣の間を、しずりもずりと来かかる折から、よろよると前にのめり出た銀之丞、千六の二人の姿に眼を止めた満月は、思わずハツと立たちど佇たまつた。二人の顔を等分に見遣りながら、持つて生れた愛嬌笑いをニツコリと洩らして見せた。

魂が見る間にトロトロと溶けた二人は、腰の蝶ちようつがい番はずが外れたらしい。眼を白くして、口をポカンと開いたまま、ヘナヘナとその場へ土下座して、水だらけの敷石の上にベツタリと並んで両手

を支^{つか}えてしまった。茫然として満月の姿を見上げたのであった。

満月の愛嬌笑いは、いつの間にか淋しい、冷めたい笑顔に変わっていた。二人の前で駒下駄を心持ち横に倒おして、土をはねかけるような恰好をしたと思うと、銀の鈴を振るようなスツキリとした声で、

「男の恥を知らんし」

とタツタ一言。白^{あぎと}い腮^とを三日月のように反^{そむ}向けて、眉一つ動かさず。見返りもせず、襦^{うちかけ}襦^{かけ}の背中をクルリと見せながら、シヤナリシヤナリと人垣の間を遠ざかつて行つた。あとから続く三味太鼓の音。漂い残す蘭^{らんじゃ}麝^{じゃ}のにおり。

「……満月……満月……」

と囁やき交しながら雪崩れ傾いて行く人雑沓の塵埃いきれ……。

その中に両手の穢れを払いながら立上った二人の顔は、もう人間の表情ではなかつた。墓の下からこの世を呪いに出て来た屍鬼の形相であつた。血の気のない顔に生汗を滴らせ、白い唇をわななかせつつ互いの顔を睨み合つて、肩で呼吸をするばかりであつた。

「……………これが見返さいでいられましょうか」

千六の両眼から涙がハラハラと溢れ落ちた。

「……………これ程の挨拶……………か……………刀の手前にも……………捨てて……………おかれぬわい。ええつ……………」

銀之丞の美しい眼尻には涙どころか、血が鈍染^{にじ}んでいた。二人は思わず互いの両手を固く握り合っていた。その手を銀之丞は烈しく打振った。

「……千六殿……約束しよう。……イ……今から丸一年目に……イ……今一度、ここで会おう。それまでに二人とも、あの金丸長者を見返すほどの金子^{かね}をこしらえよう。二人の力を合わせても、あの売女奴^{ばいため}を身請^{みうけ}しよう」

千六は感激に溢るる涙を拭いもあえず首肯^{うなず}いた。一層固く銀之丞の手を握り締めた。銀之丞は遙かに遠ざかった満月の傘を振りかえった。ギリギリと齒齧^{かみ}みをした。

「……やおれ……身請けした暁には、思い知らさいでおこうもの

か。ズタズタに切り苛さいなんで、青痰あおたんを吐きかけて、道傍みちばたに蹴り棄てても見せようものを……」

「シツ……お声が……」

二人はそのまま人ごみに紛れて左右に別れた。大空の満月が花の上にさしかかる頃であつた。

銀之丞は東海道を江戸へ志した。

思い迫つて約束した一年の短かい間に、どうしたら望み通りの金が稼げるかと……思案に暮るる一人旅。京外れで買った尺八の歌口を嘗め嘗め破れ扇を差出しながら、宿場宿場の揚雲雀あげひばりを道連れに、江戸へ出るには出たものの、男振りよりほかに取柄のな

い柔弱武士とて、切取り強盜はもちろん叶かなわず。押借おしがり騙取かたりの度
 胸も持合わせず。賭博、相場の器用さなど、夢にも思い及ばぬま
 ま、三日すれば止められぬ乞食根性をそのまま。京都とは似ても
 似付かぬ町人の氣強さを恐れて、屋敷町や町外れの農家や小商こあきん
 人どの軒先をうろ付きまわり、一文二文の合力に、生命いのちをつなぐ
 心細さ。金儲けどころか立身どころか。派手な大小印籠いんろうまでも
 塩鰯はと剥はげ印籠に取りかえる落ちぶれよう。稀たまには場末の色町ら
 しい処で笠の中を覗き込んで馬糞まぐそ女郎や安芸げいしや妓げいしやたちにムゴがら
 れて、思わず収入みいりに有付いたり、そんな女どもの取なしで田舎いなかだ
 大尽いじんに酒肴を御馳走され、一二番の戯れ小唄の御褒美に小袖、
 穿物、手拭なぞ貰うて帰る事もあり。そのほか役者衆に拾われか

けたり、絵草子屋に売子を頼まれたりなぞ、色々な眼に出会ったものであったが、それでも女色にだけは決して近付かなかつた。

去る金持後家に見込まれて昼日中、引手茶屋に引上げられ、小謡いがまだ二三番と済まぬうちに脂あぶらぎ切った腕を首にさし廻わされた時なぞ、血相をかえて塩鱒をひねくりまわし、後あとしぎ退りして逃げ

て来るといふ、世にも身固い、涙ぐましい月日が、いつの間まにか夢のように流れて、早や笑うてくれる鬼もない来年の正月。約束の三月も程近い銀之丞が二十五の春となつた。

こうなれば最早もはや、致し方もない。僅か一年の間に大金を作ろうなぞと約束したのがこつちの愚昧おろかであつた。浮世の風に吹き晒さらさ

れてみればわかる。やはり他人ひとの云う通りに世の中は、思うたほど甘いものではないらしい。

しかし約束は約束なれば是非に及ばぬ。満月の道中に間に合うように故郷へ帰らずばなるまい。播磨屋千六の顔を見ずばなるまい。千六は町人の事なれば、一年の間に一万両ぐらい儲けまいものでもない。もつとも町人の事なれば、そうなつてみると、おのが身代が惜しゆうなつて、気が摧くじけていまいとは限らぬが、もしも、さような事になれば一文無しのことちの方が、却かえつて確かなもの。否いやおう 応なしに千六の尻を押おいて金輪際、満月を身請させいでおこうものか。もし又、万が一にも、その期ごに及んで満月が二人の切ない情こころを酌くまず、売女ばいたらしい空文句を一言でも吐ぬかしおつ

て、吾儕われらを手玉に取りそうな氣ぶりでも見せたなら最後の助。こ
 っちは元より棄てた一生。一刀の下に切伏せて、この年月としつきの怨うらみ
 恨はを晴ららいてくれるまでの事。所詮、それ位の役廻りにしか値打
 せぬ吾身の運命であつたかも知れぬが……と、とつおいつ思案の
 うちに、旅支度という程の用意も要らぬ着のみ着のままの浪人姿。
 ブラリと立出づる吹ふき晒さらしの東海道。間道伝いに雪の箱根を越え
 て、下れば春近い駿河の海。富士の姿に満月の襟元を思い浮かめ、
 三保の松原に天女を抱き止めた伯はくりゆう竜りゆうの昔を羨み、駿府から岡
 部、藤枝を背後うしろに、大井川の渡し賃なに無けなしの懐ふところ中ちゆうをはたい
 て、山道づたいの東海道。菊川の宿場に程近く、後になり先にな
 って行く馬士まごどものワヤク話を聞くともなく聞いて行くうちに、

銀之丞はフト耳を引つ立てて、並んで曳かれて行く馬の片陰に近付いた。声高く話す馬士まごどもの言葉を一句も聞き洩らすまいと腕を組み直し、笠を傾けて行つた。

菊川の家やなみ並外れから右に入つて小夜さよの中山を見ず。真直に一里半ばかり北へ上ると、俗に云う無間山むげんざんこと俱利ヶ岳だけの中腹に、無間山むげんざん、井遷寺せいせんじという梵刹おてらがある。この寺は昔、今川義元公が戦死者の菩提ぼだいのために、わざと風景のよい山の中腹に建てられたもので、寺領も沢山に附いておつたが、その後、信長公、秀吉公、東照宮様と代が變つて来るうちに、その寺領もなくなり、久しく無住の荒れ寺となつて、妖怪ばけものが出るといふような噂まで立っていた。

ところがツイ二三年前のこと、甲州生れの大工上りとかいう全身いれずみに黥をした大入道で、さんたらおしよう二多羅和尚という豪傑坊主が、人々の噂を聞いて、一番俺がその妖怪ばけものを退治たいじしてくれようというのでその寺に住すまい込み、自分でそこ、ここを修繕して納まり返り、近郷近在の無頼漢を集めて御本堂で賭博ばくちを打たせ、寺てら銭せんを集めて威張はっている。自分も相当の好きらしく時々寺銭を賭はっているそうだが、不思議な事にこの坊主を負かすと間もなく、御本堂がユサユサと家鳴やなり震動して天井から砂が降ったり、軒の瓦すべが辻つたりする。その物ものすごさに一同が居たたまれずに逃げ出すと、又、間もなく静まり返るので、打連れて本堂に引返してみると、こは如何に。今まで山のように積んであつた寺銭ばせんも場銭ござも盆莫ござ塵ざも、賽さ

いのめ

目までも虚空に消え失せて、あとには夥しい砂ほこりが分厚く積っているばかり。それが恐ろしさと馬鹿らしさに皆、忘れても和尚を負かさぬように気を付けているが、それでも時々大地震のような家鳴やなり、震動が起るので、事によるとやはり狐狸こりの仕業しわざかも知れない。とはいえ場所はよし、和尚の取持とりもちはよし、麓の一本道に見張りさえ付けておけば、手入れの心配は毛頭ないので、入れ代り立代り寄り集まって手遊びするものの絶えぬところが面白い。もちろんそのような家鳴、震動の度たびごと毎に、麓の百姓に聞いてみても、そんな地震は一向知らぬという話。ナント面妖な話ではないかえ。その狐か狸さくらかが喋さつて行つた金高を集めたなら、大したものづら……といったような話を、頭に刻み込み刻み込み行

くうちに銀之丞は、いつの間にか菊川の町外れを右に曲つて、松の間の草だらけの道を、無我夢中で急いでいた。……大工上りのおげぼうず袁許坊主……井遷寺のカラクリ本堂……思いもかけぬ大金儲けいとぐちいのちの緒……生命がけの大冒険……といったような問題を、心の中でくり返しくり返し考えながら……。

無間山井遷寺は聞きしにまさる雄大な荒廢寺であつた。星明りに透かしてみると墓原らしい処は一面の竹藪となつて、数百年の大銀杏いちようが真黒い巨人のように切れ切れの天の河を押し上げ、本堂の屋根に生えたペンペン草、紫苑のたぐいが、下から這いつた蔦つたや、葛蔓くずかずらとからみ合つて、夜目にもアリアリと森のよ

うに茂り重なつていた。

見張りの眼を巧みに潜つてきた銀之丞が、閉め切つた本堂の戸の隙間からチラチラ洩れる火影を窺のぞいてみると、正しく天下晴れての袁彦道ぼくちの真盛り。月代さかやきの伸びた荒くれ男どもは本職の渡世人らしく、頬冠りや向う鉢巻で群がつている穢むさくる苦しい老若は、近郷近在の百姓や地主らしい。正面に雲うんりゆう竜ほりものの刺青の片肌を脱いで、大胡坐おおあぐらを搔いた和尚の前に積み上げてある寺銭が山のよう。盆莫莖ぼんごぎを取巻いて円陣を作つた人々の背後うしろに並んだ酒さけさか肴なの芳香においが、雨戸の隙間からプンプンと洩れて来て、銀之丞の空腹すきばらを、たまらなく抉えぐるのであつた。

そのうちに盆莫莖の真中に伏せてあつた骰さいころ子壺が引つくり返

ると、和尚の負けになつたらしく、積上げられた寺銭が、大勢の笑い声の中うちにザラザラと崩れて行く。それを見ると和尚が不機嫌そうにトロンとした眼を据えて、

「……これはいかん。ああ。酔うた酔うた。ドレちよつと一パイ水でも呑んで来ようか」

と云ううちに立上つた和尚の物すごい眼尻に引かえて、唇くちもと二元の微かな薄笑いが、裸体はだか蠟燭の光りにチラリと映つたのを銀之丞は見逃がさなかつた。

銀之丞はコツソリと雨戸から離れて、ドシンドシンという和尚の足音が、どこへ行くかを聞き送つていた。

和尚の足音は渡わた殿どのを渡つて庫裡くりの方へ消えて行つた。その

闇がりくらりで水を飲む柄杓ひしやくの音がカラカラと聞こえたが、やがて又今度は音も立てずにヒツソリと渡殿を引返して、何やドツと笑ひ合う賭博連中ばくちのどよめきを他所よそに、本堂の外廊下の暗やみに消え込んで行つたと思うと、不思議なるかな。さしもの本堂の大伽藍だいがらんの鴨井かもいのあたりからギイギイと音を立てて揺れはじめ、だんだん烈しくなつて来て本堂一面に砂の雨がザアザアと降り出し、軒の瓦がゾロゾロガラガラと迂り落ちて、バチンバチンと庭の面もを打つ騒ぎに、並居なみいる渡世人や百姓の面々は、すはこそ出たぞ、地震地震と取るものも取りあえず、燭台を蹴倒し、雨戸を蹴放けはなして家の外へ飛び出せば、本堂の中は真暗闇となつて、聞こゆるものは砂ほこりの畳なだに頽雪なだるる音ばかりとなつた。

なれども銀之丞はちつとも驚かなかつた。こつそりと渡殿の欄干を匍はい上り、本堂の外縁にまわり込んでみると、本堂の真背後まうしろに在る内陣と向い合つた親柱を、最前の三多羅和尚が双肌脱ぎとなり、声こそ立てねエイヤエイヤと、調子を計つて押しつ緩めつしているけはいである。さては前以て察した通りにこの和尚奴、自身大工の心得があるのを幸い、本堂のアタリアタリの締りを弛め、普通なみの者の力でも拍子を揃えてゆすぶれば、次第次第に揺れ出すように仕掛け、天井裏には砂でも積んでおいて、客人達が勝負に夢中になつている油断を見澄まして、コツソリとカラクリを動かし、この辺の無智な奴どもを脅やかし、悪銭を奪いおつたに相違ない。これこそ天の与うる福運。取逃がしてなるものかと思

ううち、ぬき足さし足和尚の背後うしろに忍び寄り、腰の鍔脇差さびわきざしをソ
 ロソロと音のせぬように抜き放ち、和尚の背中のマン中あたりに
 シツカリと切きつさき先を狙い付け、矢声もろとも諸手突もろてきに、柄つかも透
 れと突込めば、何かはもつてたまるべき、悪獣のような叫び声を
 ギヤアツと立てたがこの世の別れ、あおのけ様に引っくり返つて、
 そのまま息が絶えてしまった。その声に驚いて、外に逃出してい
 た百姓連中がワイワイと駈かけあつ集まって来るのを、銀之丞は和尚の
 屍体に片足かけたまま見下した。引抜いた血刀を構えながら凜りんり
 々たる声を張上げて叫んだ。

「……騒ぐな騒ぐな。百姓共。よく聞けよ。身共は京都に在おわしま
 す一品薬王寺宮様の御申付おもうしつけによつて是これまで参まゐりつた宮侍、
 いっほんやくおうじのみや

吉岡鉄之進と申す者じや。そもそもこの寺は今川義元公の没落後、東照宮様の御心入れによつて、薬王寺宮様の御支配寺になつていたものをこれなる悪僧が横領致して、不思議なる働きをなし、その方共が持寄る不浄の金を掻集めおる噂が、勿体なくも宮様の御耳に入り、一日も早く件の悪僧を誅戮ちゆうりくなし、下々の難儀を救い取らせよとの有難い思召おぼしめしによつて、はるばる身共を差遣さしつわされた次第じや。只今首尾よくこの悪僧を仕止めた以上、この寺に在る不浄の金銭は残らず宮家に於て召上げられる故に左様心得よ。なおその方共は身共の下知に従つて、隠れたる金銀を探し出し、身共の差図取りに取形付けを致すならば、今日持つて参まいかつた賭博ばくちの資金もとでは各自めいめいに相違なく返し遣わすのみならず、

賃銀は望みに任ずるであらう。もし又、否やを申す者があるならば、一品宮様の御罰までもない。身共がこの和尚と同様に一刀の下に斬棄きりすてる役柄故、左様心得さようよ」

それから数日の後のち、銀之丞は一品薬王寺宮御門跡の御賽銭宰領に変装し、井遷寺の床下に積んであつた不浄の金を二十二のぜにが銭

ます吠すに入れ、十一頭の馬に負わせ、百姓共に口を取らせて名古屋

まで運び、諸国為替問屋、茶ちやちゆう中ちゆうの手で九千余両の為替に組直

させ、百姓共に手厚い賃銀を取らせて追返すと、さつぱりと身姿みなりを改めて押しも押されもせぬ公家侍の旅姿となり、夜よを日に次い

で京都へと急いだ。

一方、銀之丞に別れた播磨屋千六は、途中滞りもなく長崎へ着いた。

千六は長崎へ着くと直ぐに拔荷ぬけにを買いはじめた。拔荷ぬけにというのは今でいう密貿易品のこと、翡翠ひすい、水晶、その他の宝玉の類、緞子どんす、繻珍しゅちん、羅紗ラシヤなぞいう呉服物、その他禁制品の阿片アヘンなぞいうものを、密かに売買いするのであったが、その当時は吉宗将軍以後の御政道の弛ゆるみかけていた時分の事だったので、面白いほど儲かった。モトモト千六は無敵な商売上手に生れ付いていたのが、女に痴呆ほうけたために前後を忘れていたに過ぎないので、こうして本気になって、女にも酒にも眼を呉くれず、絶体絶命しにみの死身しにみになっ

て稼ぎはじめると、腕つききの支那人でも敵かなわないカンのいいところを見せた。のみならず千六は賭博ばくちにも勝すぐれた天才を持つていたらしく、相手の手の中うちを見破つて、そいつを逆に利用する手がトテモ鮮やかでスゴかったので仲間の交際つきあいではいつも花形になつたばかりでなく、その身代は太るばかり。長崎に来てからまだ半年も経たぬうちに、早くも一万両に余る金を貯めたのを、彼の夜の事を忘れぬように三五屋さんごやという家号で為替に組んで、大阪の両替屋みわづる、三輪鶴さんごやに預けていた。従つて三五屋という名前は大阪では一廉ひとかどの大商人おおあきんどで通つていたが、長崎では詰まらぬ商人あきんど宿に燻こそぶつてゐる狐鼠こそ狐鼠こそ仲買こそに過ぎなかつた。

その年の秋の初めの事であつた。千六は何気なく長崎の支那人

街を通りかかると、フト微かに味噌の臭いがしたので立ち佇まつた。そこいらを見まわすと前後左右、支那人の家ばかりだから、にんにくや大蒜の臭においがする分にはチツトモ不思議はない筈であるが、その頃までは日本人しか使わない麦味噌の臭においがするとは……ハテ……面妖な……と思つたのが、大金儲おおかねもうけの緒いとぐちであつたとは流石さすがにカンのいい千六も、この時まだ氣付かなかつたであらう。頻りに鼻をヒコ付かせて、その臭においのする方向へ近附いて行くうちに味噌の臭においがだんだんハッキリとなつて来た。間もなく眼の前に屹きつた立っている長崎随一の支那貿易商、福昌号ふくしょうごうの裏口に在る地下室の小窓から臭におつて来ることがわかつた。そつと覗いてみると、暗い、微かな光線の中に一面に散らばつた鋸屑おがくずの上に、百斤きんい

入と見える新しい味噌桶が十個、行儀よく二行に並んでいる。残暑に蒸るる地下室で、味噌が腐りそうになつたので、小窓を開いて息を抜いているものらしかった。

そこで千六は暫く腕を組んで考えていたが、忽ちハタと膝を打つて、赤い舌をペロリと出した。

「……そやそや……味噌桶と見せかけて、底の方へは何入れとるか知れたもんやない。この頃長崎中の抜荷買が不思議がつとる福昌号の奸闌繰ちうのはこの味噌桶に違いないわい。ヨオシ来た。そんなら一つ腕に縊よりをかけて、唐人共の鼻を明かいてコマソかい。荷物の行く先はお手の筋やさかい……」

そんな事をつぶやくうちに千六はもう二十日鼠のようにクルクルと活躍し初めていた。

先ず福昌号の表口へ行って、その店の商品の合あいじるし印しが○に福の字である事を、その肉の太さから文字の恰好まで間違いないように懐紙に写し取った。その足で長崎中の味噌屋を尋ねて、福昌号に味噌を売った者はないかと尋ねてみると、タツタ一軒、山口屋という味噌屋で三百五十斤きんの味噌を売ったというほかには一軒も発見し得なかった。

それから同じく長崎中の桶屋を、裏長屋の隅々まで尋ねて、福昌号の注文で新しい味噌桶を作った家うちを探し出し、そこで百斤入の蓋附桶を十個作った事が判明すると、千六はホツと一息して喜

んだ。

「それ見い。云わんこつちやないわい。百斤入の桶が十個に味噌がタツタ三百五十斤……底の方に鋸屑おがくずと小判が沈んどるに、きまつとるやないか」

とつぶやくと、思わず躍り上りたくなるのをジツと辛棒して、何喰わぬ顔で同じ型の蓋附桶を十個、大急ぎで逃あつらえた。それから今度は金物屋に行つて鉛なまこの半円鑄を六百斤ほど買集め、そつくりそのまま町外れのシロカネ屋（金属細工屋）に持つて行つて、これは蓬萊島ホルモサから来た船の註文ゆえ、特別念入りの大急ぎで遣つてもらいたい。蓬萊島ホルモサでも一番の大金持、万熊仙まんゆうせんという家で、この六月に生れる赤ん坊のお祝いに、部屋部屋の天井から日本の小

判を吊るすのだそうで、ソツクリそのまま蠅除けはいよにすると話。普通の家では真鍮うちの短冊を吊すところを金持だけに凝こつた思案をしたものらしい。面倒ではあろうが、この鉛鑄なまこの全部を大急ぎで小判の形に打抜いて金箔をタタキ付けてもらいたい。糸を通す穴は向うに着いてから明けるそう。本物の小判のお手本はここに在る……といったような事を、まことしやかに頼み込んだ。

賃銀がよかつたのでシロカネ屋の老爺おやじは、さほど怪しみもせず、両手を揉もみ合わせて引受けた。六百斤のナマコを三日三夜がかりで一万枚に近い小判型に打抜いて畳目まで入れたものに金箔を着せたのを、千六に引渡した。

千六は、その小判を新しいからまい唐米の袋に詰込んで、手車に引か

せ、歸りに桶屋から十個の桶を受取り、序ついでに山口屋から味噌を四
百斤と、材木置場から鋸屑おがくずを五俵ほど買込んで、同じ手車に積
ませて、その日の暮れ方に舟着場へ持つて来た。そこで百石積の
玄海丸という抜荷ぬけに専門の帆前船を探し出して顔なじみの船頭に酒
手を遣り、水揚人足に命じて車の上の荷物を全部積込ませると、
念のためもう一度上陸してこの間の福昌号の裏口に行き、人通り
の絶えたところを見計みはからつて地下室の小窓に鼻を近付け、今一度
中の様子を窺のぞいてみた。中には四五日前の通りに味噌桶が行列し
て、黴かびくさ臭い味噌の臭気においがムンムンする程籠もつていた。

ニンガリと笑つた彼は立上つて空を仰いでみた。この辺では穏
やかでない東寄こちりの南風はえが数日来、絶え間なしに吹いているとこ

ろで、追手の風でも余程自信のある船頭でないと船を出せるものでないことが商売柄千六にはよくわかつていた。

舟着場に帰った千六は船頭を捉つかまえて、明日早朝に船が出せるかどうか。五島の城ヶ島まで行けるかどうか。船賃は望み次第出すが……と尋ねてみると、淡白らしい船頭は、城ヶ島なら屈託する事はない。心配する間もないうちに行き着いてしまう。ほかの船なら生命いのちがけの賃銀を貰うか知れぬが、この玄海丸に限って無駄な銭は遣わつしやるな。この風に七分の帆を張れば、明日あすの夕方までには海上三十里を渡いて見せまつしよ……と自慢まじりに鼻をうごめかすのであった。

千六は天の助けと喜んだ。すぐに多分の酒手を与えて船頭を初

め舟子かこかんどり舵取まで上陸させて、自分一人が夜通し船に居残るよう
に計らつた。

船の中が空っぽになつて日が暮れると、千六は提灯を一つ点け
て忙がしく働き初めた。十個の味噌桶の底にそれぞれ擬まがい小判を
平等に入れて、上から鋸屑おがくずを被おおいかぶせ、その上から味噌を詰
込んでアラカタ百斤の重さになるように手加減をした。嚴重に蓋
をして目張りを打つと、残つた味噌と鋸屑おがくずは皆、海に投込んで
しまった。アトを綺麗はきだに掃出して、海岸を流して行く支那ソバを
二つ喰うと、知らぬ顔をして寝てしまった。

翌る朝は、まだ夜の明よけないうちに船頭たちが帰つて来た。昨ゆ

夜の酒手が利いたらしくキビキビと立働らいて、間もなく帆を十分に引上げると、港中の注視の的になりながら、これ見よがしに港口を出るや否や、マトモーパイに孕んだ帆を七分三分に引下げた。暴風雨模様の高浪を超越し超越し、白泡を噛み、飛沫を蹴上げて天馬空を駛るが如く、五島列島の北の端、城ヶ島を目がけて一直線。その日の夕方も、まだ日の高いうちに、野崎島をめぐつて神之浦へ切れ込むと、そこへ山のような和蘭陀船が一艘碇泊つて、風待ちをしているのが眼に付いた。

「ナルほどなあ。千六旦那の眼ンクリ玉はチイツト計り違わつしやるばい。摺鉢の底の長崎から、この船の風待ちが見えとるけになあ。ハハハハ……」

と感心する船頭の笑い声を眼で押えた千六は、兼ねて用意していた福昌号の三角旗を船の舳すべに立てさせた。風のない島影の海岸近くをスルスルと迂すべるように和蘭船へ接近して帆おろを卸すと、ピツタリと横付けにした。

船の甲板から人相の悪い紅毛人の顔がズラリと並んで覗いていた。口々に和蘭語オランダで叫んだ。

「何だ貴様は……何だ何だ……」

千六はもう長崎に来てから、各国の言葉に通じていた。その中うちでも和蘭語オランダは最も得意とするところであった。

「福昌号から荷物を受取りに来ました。この頃、長崎の役人の調べが急に八釜やかましくなつて、仕事が危険やばくなりましたのに、この風

で船が出なくなつて、皆青くなつてゐるところです。支那人はみんな臆病ですから、私が頼まれて四百五十斤の小判を積んで、嵐を乗切つて来たのです。どうぞ荷物を渡して下さい」

と殆んど疑問の余地を残さないくらい巧妙に、スラスラと説明した。

「フーム。そうかそうか。それじゃ上れ」

と云うと船から梯子はしごを卸おろしてくれたので千六は内心ビクビクしながら船頭と二人で上つて行つた。そうして船長室で船長に会つて葡萄酒と珈琲コーヒーと、見た事もない美味い果物おいしいを御馳走になつた。

千六は福昌号の信用の素晴らしいのに驚いた。積んで来た十個の味噌樽が全部、ロクに調べもせずオランダに和蘭船に積込まれて、代

りに夥しい羅紗ラシヤとギヤマンの梱包が、玄海丸に積込まれた。まだ羅紗と、絹緞けんどんと翡翠ひすいの梱包が半分以上残っているが、この風と玄海丸の船腹では積切れまいし、こつちも実はこの風が惜しいばかりでなく、非常に先を急ぐのだから、向うの海岸に卸しておく。今一度長崎へ帰って、風を見てから積取りに来いと云つて、千六と船頭を卸すと、和蘭船オランダはその夜のうちに、白泡を嚙む外洋に出て行ってしまった。

アト見送つた千六は慌しく船頭の耳に口を寄せた。

「直ぐにこの船を出しておくれんか。この風を間切まぎつて呼子よぶこへ廻わつてんか。途中でインチキの小判と気が付いて引返やいて来よつたら叶かなわん。和蘭陀船オランダは向い風でも構いよらんけに……呼子ま

で百両出す。百両……なあ。紀国屋文左衛門や。道程みちのりが近いよ
 つて割合にしたら千両にも当るてや、なあ。男は度胸や……。あ
 とはコンタの腕次第や。酒手を別にモウ五十両出す……」

玄海丸は思い切つて碇いかりを抜いた。それこそ紀国屋文左衛門式の
 非常な冒険的な難航海の後のち、翌る日の夕方呼子港へ這入つた。そ
 こで玄海丸を乗棄てた千六は巧みに役人の眼を眩くらまして荷物を陸
 揚して、数十頭の駄馬に負わせた。陸路から伊万里いまり、嬉野うれしのを抜
 ける山道づたいに辛苦艱難をして長崎に這入ると、すぐに仲間の
 抜荷買ぬけにを呼集め、それからそれへと右から左に荷を捌さばかせて、忽
 ちの中うちに儲けた数万両を、やはり尽ことごとく為替にして大阪の三輪鶴みわづるに
 送り付けた。

千六のこうした仕事は、その当時としては実に思い切った、電光石火的なスピード・アップを以て行われたのであった。

果して、そのあとから正直な五島、神之浦こうのうらの漁民たちが海岸にコンナ荷物が棄ててありましたと云つて、夥しい羅紗や宝石の荷を船に積んで奉行所へ届出たというので長崎中の大評判になった。これこそ抜荷の取引の残りに相違ないというので与力、同心の眼が急に光り出した。結局、五島の漁夫りようし達が見たという〇に福の字の旗印が問題になって、福昌号に嫌疑がかかつて行つたが、その時分には千六は最早もはや長崎に居なかつた。仲間の抜荷買連中と共に逸いちはや早く旅支度をして豊後国、日田ひたの天領に入込み、人の余

り知らない山奥の川底かわそこという温泉ひたに涵ひたつていた。

千六はそれから仲間むさしに別れて筑前の武蔵、別府、道後と温泉まわりを初めた。たとい金丸長者の死に損むさしいが、如何に躍起となつたにしたところが、とても大阪三輪鶴の千両箱を三十も一いっしょ所に積みは得えせまい。その上に銀之丞殿の蓄えまで投げ出したらば、松本楼の屋台骨を引抜くくらい何でもあるまい。もし又、万一、それでも満月が自分を嫌うならば、銀之丞様に加勢して、満月を金縛りにして銀之丞様に差出しても惜しい事はない。去年三月十日の怨恨うらみさえ晴らせば……男の意地いぢというものが、決してオモチャにならぬ事が、思い上がった売女ばいために解とかりさえすれば、ほかに思いおく事はない。おのれやれ万一思い通りになつたらば、

三日と傍へは寄せ附けずに、天の橋立の赤前垂あかまえだれにでもタタキ売つて、生恥いきはじを晒さらさせてくれようものを……という大阪町人に似合わぬズツパリとした決心を最初からきめていたのであつた。

京都に着いても満月の事は色にも口にも出さず。ひたすらに相手の行衛ゆくえを心探しにしていた銀之丞、千六の二人は期せずして祇園の茶屋で顔を合わせた。お互いに無事を喜び合い、今までの苦心談を語り合い、この上は如何なる事があつても女の情に引かされまい。満月の手管に乗るような不覚は取るまい。必ず力を合わせて満月を泥の中に蹴落し、世間に顔向けの出来ぬまで散々に踏み躪にじつて京、大阪の廓くわく雀すずめどもを驚かしてくれよう。日本中の

薄情女を震え上らせて見せようでは御座らぬか……と固く固く誓い固めたのであった。

何はともあれ善は急げ。二人がこうして揃った上は便べんべん々と三月十五日を待つ迄もない……というので、二人は顔を揃えて島原の松本楼に押し上り、芸げいしや妓末社を総上げにして威勢を張り、サテ満月を出せと注文をすると、慌てて茶代の礼を云いに来た亭主が、妙な顔をして二人を別の離座敷はなれに案内した。そこで薄茶を出した亭主の涙ながらの話を知っているうちに、二人は開いた口が塞がらなくなったのであった。

満月は、モウこの世に居ないのであった。

「お聞き下されませ去年の春。あの花見の道中の道すがら満月が、

昔なじみのお二ふたかた方様に、勿体ない事を申上げて、お恥かしめ申上ました事は、いつ、誰の口からともなく忽ちうちの中に京、大阪中の大評判になりましたもので……。

……ところがその評判につれて、お二人様のお姿が、京、大阪界隈にフツツリと見えなくなりますと、御老人の気弱さからでも御座りましようか。金丸大尽様が何とのおおうるたえ御周章になりまして、お二人様から、どのように満月が怨まれていようやら知れぬ。満月と自分の身体からだに万一の事が無いうちにと仰言るような仔ことわり細で、こちらからお願ひ申上げまする通りのお金を積んで、満月ごとを御身請おみうけなされまして、嵯峨野の奥の御邸おやしきを御造作なされ変えて、お城のように締りの嚴重な一廓を構え、その中に美事な別

莊好みのお家敷やしきを作り、水を引き、草木そうもくを植えて、満月をお住まわせになりました。

……それは見事なお構えで御座いました。お客にお出でになりましたお江戸の学者、鼻曲山はなまがりさんじん人様も、お筆に残しておいでになります。私どもが御機嫌伺いに参りましても根府川ねぶの飛石とびいし伝い、三尺の沓脱くつぬぎは徳山みかげ花崗ちりめんの縮緬ちりめんタタキ、黒縁あやぼねに綾骨べりなんきの障子しょうじ。音もなく開きますれば青々とした三畳敷。五分縁べりなんきの南なん京更紗んさらさ。引ずりごて小手の砂壁。楠の天井。一間二枚の襖ぎんていは銀泥ぎんていに武蔵野の唐紙らくやき。楽焼らくやきの引手。これを開きますると八畳のお座敷は南向のまわり縁。紅カリンの床板、黒柿の落し掛。南天の柱など、眼を驚かす風流好み。京中を探しましても、これ程のお座

敷はよも御座いますまい。満月どのの満足もいかばかりかと存じておりましたが、満つれば欠くる世の習いとか。月にむら雲。花に嵐の比喻たとえも古めかしい事ながら、さて只今と相成りましては痛わしゆうて、情のうて涙がこぼれまする事ばかり……。

何をお隠し申しませう。満月ことはまだ手前の処で勤めに出ておりまする最中から、重い胸の疾患やまいに罹かかつておりましたので、いずれに致しましても長い生命いのちではなかつたので御座いまする。されば金丸大尽様からの御身請の御話が御座りました時にも、手前の方から商売気を離れまして、この事を残らず大尽様にお打明け致しまして、かかり付けのお医者様順庵様までも御同席願いました上で、かような不治の疾患やまいの者を御身請なぞとは勿体ない。

満月ことを左程御鼻負ごひいきに思召し賜わりまするならば、せめて寮へ下げて養生致させまする御薬代なりと賜わりましたならば、当人の身に取り、私どもに取りまして何よりの仕合わせに御座ります。所詮、行末の計られませぬ病人を、まんろくな者と申しくるめて御引取願いましては商売冥利に尽きますると平に御宥免おゆるしを願いました、流石さすがに長者様とも呼ばれる御方様の御腹中は又格別なもので、さては又あれが御老人の一徹とでも申上るもので御座いませうか、いやいやそれは要らざる斟酌そなた。楼主そなたの心入れは重々忝かたじけないが、さればというてこのまま手を引いてしもうてはこつちの心が一つも届かぬ。商売は商売。人情は人情じゃ。皿茶碗の疵物きずものならば、疵きずのわかり次第棄てても仕舞しまおうが、生きた人間

の病気は、そのようなものと同列には考えられぬ。袖振り合うも
 他^た生^{しょう}の縁とやら。それほど病気ならばこちらへ引取つて介抱
 しようなるのが人情。まさかに満月の身体^{からだ}を無代価^たで引取る訳に
 は行くまいと仰言る、退引^{のつび}きならぬお話。こちらもその御執心と
 御道理に負けまして、満月をお渡し申上げたような次第で御座り
 まする。……が……。

……さて満月さんをお引取りになりましたからの大尽さまのお
 心づくしというものは、それはそれは心にも言葉にも悉^つくされる
 事では御座いませなんだ。京大阪の良いお医者というお医者を尋
 ね求め、また別に人をお遣わしなされて日本中にありとあらゆる
 癩^{ろうがい}のお薬をお求めになりました。そのほか大法、秘法の数々、

加持^{かじ}、祈祷のあらん限り、手をつくし品を換えての御介抱で御座
いましたが、定まる生命^{いのち}というものは致し方のないもので、去年
の夏もようように過ぎて秋風の立ちまする頃、果敢^{はか}なくも二十一
歳^{いちじ}を一期としてこの世の光りを見納めました。その夜は如何よう
なめぐり合わせでも御座りましたろうか、拭うたような仲秋の満
月の夜で御座いましたが、重たい枕を上げる力ものうりました
人間の満月どのは、おろおろしておいになりまする金丸様のお
手と、駄付けて参りました私の手を瘠せ枯れた右と左の手に力な
く振って、庭^{おもて}の面にさらばう虫の声よりも細々とした息の下に、
かような遺言をなされました。

……これまでの方々^{かたがた}様の御心づくし、何と御礼を申し上げます

ようやら。つたないこの身に余り過ぎました栄耀^{えいよう}栄華^{えいが}。空恐ろ
 しゆうて行く先が思い遣られまする計^{はか}りで御座います。ただ、お
 ゆるし下されませ。金丸様と、御楼主様の御恩のほどは生々^{しゅう}
 世^{じょう}々^ぜ 犬畜生、虫ケラに生れ代りましようとも決して忘れは致
 しますまい。

……わたくし幼少^{おきな}い時より両親^{ふたおや}に死に別れまして、親身^{しんみ}の親
 孝行も致しようのない身の上とて、この上はただ御楼主^{ごないしよさま}様の御
 養育の御恩を、一心にお返しするよりほかに道はないと、それば
 かりを楽しみに思い詰めて成長^{おわき}くなりましたところへ、肉親の親
 から譲られましたこの重病。いずれ長い寿命はないものと思ひ諦
 らめましてからというもの、一も御店のため、二も御楼主^{ごないしよさま}様へ

の御恩返しとあらゆる有難い御嬬客様を^{おきやくさま}手玉に取り、いく程の罪を重ねましたことやら。それだけでも来世は地獄に堕ちましよう。その中にも^{うち}忘れかねましたのは、あの銀様と千様のこと。今年の花見の道中で、あのようない事を申しましたのも、^{しんそこ}心底からお二人様の御行末を^{いと}愛しゆう思いましたればの事。早ようこのようない女を思い切つて、男らしい御生涯にお入りなされませと、^{いっも}平生から御意見申上げたい申上げたいと思ひながらも、それがありません悲しい思ひが、お変りなされたお二人のお姿を見上げますと一時に、たまらぬようになりまして、熱い固まりを胸にこらえながら、やつとあれだけ申しましたもの……それを、どのような心にお取りなされましたやら。それから^{のち}後というものフツツリ

とお二人のお姿が京、大阪の中うちにお見えになりませぬとやら。その後の御様子を聞くすべもないこの胸の中うちの苦しき辛つらさ。お二人様は今頃日本のどこかで、怨めしい憎い女おほしめと思召して、寝ても醒めても怨んでおいでなされましようか。それとも、もしやお若い心の遣やる瀬なさにこの世を儚はかなみ思い詰めて、あられぬ御最期をなされはせまいか。これはこの身の自惚うぬぼれか。思い過ごごしか。罪の深さよ。浅ましきよと、思いめぐらせばめぐらすほど、身も心も瘠せ細る三日月の、枯木の枝に縋り付きながら、土の底へ沈み果てまする、わたくしの一生。

……わけても勿体ない御ことは金丸様。御身請の御恩は主しゆさま様の御恩、親様の御恩にも憎して深いものと承わっておりながら、

身をお任せ申します甲斐もない、うつそみの脱殻ぬけがらよりも忌ま
 わしいこの病身、逆様さかさまの御介抱を受けまするなりにこの世を去
 りまする面目なさ。空恐ろしさ。来世は牛にも馬にも生れ變りま
 して、草を喰べ、水を飲みましても貴方様を背負いまする身の上
 になりまするようにと、神様、仏様に心中の御願はかけながらも、
 この世にては露ほども御恩返しの叶かなわぬ情なさ。女とはかような
 ものかと夕蟬の、草の葉末に取りついて、心も空に泣き暮らすば
 かり。

……神様、仏様の御恩は申すに及ばず、この世にてお世話様に
 なりました方々や、不束ふつつかなわたくしに仮初かりそめにも有難いお言葉
 を賜わりました方々様へは、これこの通り手を合わせます。た

だ何事もわたくしの、つたない前世の因果ゆえと思召おほしめして、おゆるしなされて下されませ……。

……と……云わるる声も絶え絶えに、水晶のような涙がタツタ二すじ、右と左へ、緞子の枕に伝わり落ちると思ううちに、あるかないかの息が絶えました。それはちようど大空の澄み渡った満月が、御病室の屋やの棟を超える時刻で御座いました。

……金丸長者様の御歎きは申すまでも御座いませぬ。この世の無常とやらを深くもお悟りになったので御座いませう。それから間もなく、さしもお美事すまいなお住居をお建て換えになりました。一字のお寺を建立なされ、無明山満月寺と寺号をお附けになりました。去るあたりから尊い智識をお迎えになりましたして御住職とな

され、満月どののために仰ぎょうさん山な施せ餓鬼がきをなされまして、御自身も頭を丸めて法ほつたい体たいとなり、法名を友ゆうげつ月と名乗り、朝から晩まで鉦かねをたたいて京洛の町中を念仏してまわり、満月どのの菩提を弔うておいでになります。先祖代々そろばん算盤いのちを生命いのちと思うておりまする私たびごとどもまでも、その友月上人様の御痛わしいお姿を拝みまする度たびごと毎に、まことに眼も眩くられ、心もしどろになりまするばかり……」

と云ううちに松本楼の主人は涙を押えて声を呑んだ。

銀之丞も、千六も、もう正体もなく泣崩れていた。ことに播磨屋の千六は町人のボンチ上りだけに、取止めもなく声を放つてワアワアと泣出すのであった。

嵯峨野の奥、無明山満月寺の裏手に、桜吹雪に囲まれた一基の
 美事な新墓が建っている。正面に名娼満月之墓と金字を彫り、裏
 に宝暦二年仲秋行年二十一歳と刻きざんである。

その前に香華を手向けて礼拝を遂げた老僧と新発意しんぼち二人。老僧
 は金丸長者の後身友月ゆうげつ。新発意の一人は俗名銀之丞ぎんしやうこと友銀、
 今一人は千六こと友雲であつた。いずれも三月二十一日……思い
 出も深い島原の道中から七日目のきよう、一切合財の財産を思い
 切つて満月寺に寄進し、当住職を導師として剃髪し、先輩の老僧
 友月と共に、満一年振りの変り果てた満月の姿を拝んだのであつ
 た。

三人は三人とも、今更に夢のような昔を偲しのび、今を思うて代る代る法衣の袖を絞り合つた。暫くは墓の前を立上る気色もなかつたが、やがて一しきり渦巻く落花の吹雪の中を三人はよろよると満月の墓前からよろめき出た。

三人は並んで山門を出ると人も無い郊外の田圃道を後になり先になり列を作つて鉦かねをたたいた。半泣きの曇り声を張上げて念仏を初めた。

「南なア無むウ阿あア弥みイ陀だア仏ぶつウ」

「ナアン……マアイ……ダア——アア」

「ナア——モオ——ダア——アア」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

初出：「富士」

1936（昭和11）年4月15日発行

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2006年5月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

名娼満月

夢野久作

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>